市民と市長の対話集会「緊急財政対策計画について」

令和元年 11 月 5 日（火）午後 7 時～8 時 10 分
緑の里くろつち会館

〇意見交換議事録

発言者 A：　小郡市の中の体制は、残業ひとつにしても、企業のいろいろなノウハウなどを入れてほしい。とくに管理職の方々はちゃんと改革がなされるのか、今の時代についていけているのか心配している。財政難という状況はわかるが、市の管理職は勉強会などの研修に、大いにお金を使ってやっていただきたい。例えばこういうちょっとした催しがある時や、話合いがある場には、一般職員が来られる。ただ上の管理職の人はほとんど動かない。そういう姿勢が今の市役所の内情だと思っている。市長の姿勢やいろんな話を理解しているのか、本当に心配しているので、研修はどんどんやっていただきたい。

　また、先日小郡のリサイクルセンターに行った。まだ事故はないが帰る時にバックする人がいるので、一方通行のマークをつけてほしい。そういう配慮が必要なことはその場に行って見てもらえればわかると思う。

　リサイクルセンターに持ち込む人の中には、ペットボトルの外のラベルを外さない、洗ってこない、蓋を外さないで持ってくる人がいる。「ペットボトルを洗って出してくださいよ」という看板もあわせてつけた方がよい。久留米市はリサイクルセンター業務を外注し、パッカー車にペットボトルの注意をマグネットで貼っていると聞いている。その辺も勉強してもらいたい。

見城副市長：　加地市長が就任した際に、「職員の意識改革をしよう」ということで、職員研修をこれでもか、これでもかというくらいやった。全員やることは一方で「もったいない」という意見もあったが、まずはそこから意識を持たせて、自分から“違和感”を感じ、行動に移していけるようにしていかなければならない。いくら振っても、振っても、それに対応しなければ物事は動いていかないので、研修をしっかりやってきたところだ。そうすることで、今少しずつ意識が改革され、このような財政対策をやれるところまできた。

　リサイクルセンターの件は、実際に行ってみて確認し、そのような方向に努めていきたいと思う。

（※リサイクルセンター内の一方通行の路面表示が消えかかっていたため塗装した。ペットボトルの洗浄については、さらに啓発に取り組みます）

黒田財政課長：　当然管理職には、きちんと今の財政状況が大変だということは説明しており、担当職員に関しても予算編成方針を伝える中で状況についてはきちんと話をしている。また、加地市長になり、市役所職員の意識改革も当然進められており、改革や研修等も受けてきている中で、自分も他の職員も、加地市長の考え方については理解をしている

状況のつもりだ。

発言者Ｂ：　ひとつお願いと報告がある。行政の方が財政危機で努力をされていることについては頭が下がる想い。ただ、先ほどの説明で、企業誘致、また企業法人税増加を強調されていたが、私どもの立石校区のインター周辺は、まさに民間開発の工業団地の増設が現在始まっているところ。売買が進んでいるところだということは多くの方が知っているかとは思うが、民間開発になるとどうしても、貯水池の扱いが気になる。近年、大雨が降る気候となっており、それに対応できる最低限の貯水池は作っていただきたい。

松崎は過去に水に浸かったということは一度もなかったが、それが今年一部出た。小河川が満水状態になってどんどん水位が上流へ上流へと上がっていく。今現在、インター周辺だけでも、開発の話があっているところが 30 ヘクタール以上はあり、ほかにも 5 ヘクタールぐらいあると思う。そういったところが 2 年、3 年後に全面舗装が完了した時、大雨で一気に水が流れてくるのではないかと心配している。松崎には大添池があり、残りはほとんど立石小学校の堤を経由して下鶴地区の方に流れて行く。それと筑前町の境のヤクルト工場が 5 ヘクタール、あれも草場川に流れる。まだ造成はしているが、未着工で、そういうことも行政が主導し、官民連携プロジェクト担当という方もおられるので、しっかり頑張ってもらって企業の方に大雨に対応できる貯水池を最低限作ってもらいたい。

見城副市長：　言われたように、立石校区はインターチェンジの付近も含め、今たくさんの企業の申し出があっている。ただ単純に申し出に対して、「いいよ」と言える状況ではなく、きちんと将来の立石校区のまちづくりを考えながら、どのような企業がいいのか、どういうまちにしたらいいのか、20 年後のまちの姿を考えながら誘致を進めていきたいと考えている。

貯水池の話が出たが、昨年と今年、小郡も水害に遭い、ものすごい降水量を記録した。全国的にも問題になっているが、そういう状況下で、土地の地形が変わる、開発が進む、コンクリートで覆われていく、そうなると水が一体どういう処理をされていくのか、当然大きな行政課題として認識をしている。小郡全体が冠水する地形という特徴をもっていて、河川の問題や下水の処理といった元を断つことは大変な問題だが、自然災害ということで諦めるのではなく、やっぱり災害のことを我々行政が乗り出して考え、開発や住宅を建ててもらう時、きちんと指導できるようなガイドラインをもった上で、開発や家を建ててもらいたいと考えている。

当然、民間の話だからと手を出さないというわけにはいかないと思っている。来年ちょうど総合振興計画を改定するように準備をしており、それから都市計画マスタープランも改定時期を迎えているので、そういう中に行政が民間の中に入っていけるようなことを踏まえていきたいと思っている。今ご提案いただいた貯水池の問題や水をどう流していくのか、それから大雨の影響をどれだけ遅らせるのか、知恵出しながらやれることをしっかりやっていきたい。来年計画を作る時にまた皆さんのご意見を賜りたいと思っている。

発言者Ｃ：　民間委託の話が出たが、やはりよその自治体と比較すると、小郡は民間委託が進んでいないような気がする。財政の問題も、だいぶ違ってくると思う。もう少し、具体的な予定があれば教えていただきたい。それによって我々も理解ができる。あと小学校、中学校の対策の方向性を聞きたい。

熊丸経営戦略課長：　民間委託は小郡市でも様々な業務で行っており、システム開発、高齢者の分野が該当する。他の自治体と比べて民間委託できていなかった学校給食は、小郡小学校で施行を３年間続けており、民間委託でも食の安全上もまったく問題なく子どもたちに食を提供できるということが確認できたので、これを次の民間委託として三国小学校やのぞみが丘小学校も切り替える。効率化され、財政も改善できるかと思う。また、地域包括支援センターも来年度４月から市内３か所に民間委託予定。高齢者の要介護の支援を進めるためにも必要なことになるので、ちゃんと進めていきたいと考えている。

秋永教育長：社会の中で、子どもたちが自分の力を発揮しながら、生きていけるような人材を育てていかなければならないと教育の方でも思っている。お礼になるが、先日の休みに、立石校区では小中学校の子どもたちと地域の皆さんが一緒になってフィールドワークをしてくれたと聞いている。本当に感謝している。そのような学校と地域が一体となって子どもたちの力を育んでいくというような基盤を作っていくことが、大事だと思っている。

　それから 10 月から始めていくことだが、立石校区のような少人数校区から、オンライン英会話を始めるようにしている。民間企業の力をいただき、フィリピンの現地の英語の先生と子どもたちがマンツーマンで話をできるような英語の授業を小中で進めていく。今年度は実験的にやってみるが、次年度から時間も増やしていきながら、子どもたちのコミュニケーション能力、グローバル化に対応できる力を育んでいきたいと進めている。小中が連携しながら子どもたちの関わりを生かして、小中合同で例えば大きな学校行事をやったり、学力向上の取組を行ったり、また小学校の先生からは運動会もできるだけ一緒にやったらどうかという構想ももっておられたが、地域の皆さんのご意見を伺いながら、そういう小中のつながりを生かした教育をすすめていくことが大事じゃないかなということを、校長先生方と話し合っている。

発言者Ｄ：　些細なことだが、「広報おごおり」は、なぜ月に２回の発行なのか？月に１回でもいいと思うが、２回にしているのは意味があるのか？その辺、コスト的にも削減できる部分では？

高田秘書広報課長：　今年度は広報紙を年間 22 回発行し、１日号を 12 回、15 日号のお知らせ版についてはゴールデンウィークと 12 月に２回お休みしている。来年度はもう１回、お盆時に減らし、21 回発行したいと考えている。またその翌年、お知らせ版から１日号に集約するにあたり、記事やコーナーを整理したり、広報に挟む折込物が多くあるの

で、そのあたり１年間かけて調整しながら回数の見直しをしていきたいと思っている。

発言者Ｅ：　課長たちに質問したい。できれば一番若い人に回答してもらいたいが、加地市長になって２年半経って、加地市長の前の時に市職員としての意識と、２年半経った今のどのようにお変わりになったか聞かせてほしい。

小峰官民連携 PJ 主幹：　一番若いということで、私がお答えさせてもらう。「つながるまち小郡」というスローガンを掲げて 2 年半経ったが、今まで確かに行政主導というか、市民の皆さんからつぶさに意見を聞く姿勢は、なかなかできないところも正直あった。このような対話集会もそうだが、積極的にこういった機会を増やしていくことは大事かなと、職員も実感しているところだと思っている。また、今回財政という大変難しい問題に直面しているが、市民の皆さんと力を合わせていくことには変わりがないのかなと思う。これは今後財政的な予算は小郡市だけでなく、多くの地域が直面していくことで、お金のないところは力を合わせいかなければ、行政の職員だけではなかなかできないこともどんどん多くなっていくのではないかなと感じている。

また、加地市長はこういう現状を外にアピールしていくという姿勢があり、ホームページもそうだが、広報活動に力を入れていくことについては職員も意識がだんだん醸成されていっているかと思う。職員も私も未熟なところが多いので、いろんなご意見や叱咤を受け入れながら、一緒にいい小郡市にしていきたいと考えている。

発言者Ｆ：　市長の全体的な説明は一方ではわかるが、やはり私たち住民としては行政サービスをどんどん切り詰められていくのではないかということを非常に危惧している。財政的にもずっと赤字続きで、すると私たち高齢者団塊の世代は死ぬ前に 2040 年までずっと我慢せねばならないのか？と思ってしまう。小郡市に住んどって良かったなと思えるような行政サービスをぜひしてもらいたい。よその市から聞くと、小郡市は税金は高いけども、サービスも少ないという意見も聞く。災害は仕方ないにしても、公共事業に関しては優先順位で抑えられるのか、最優先でやっていくのかとか、こうした会議を開いて市民にわかるように説明してもらいたい。

加地市長：　大事な質問をしてもらったと思っている。こういう説明をするとどうしても、暗いイメージが広がることがとても耐えられないが、これは改善するための大きなステップという風に考えていただきたい。

限りあるお金の使い道を考えたとき、小郡市はこれまで道路などに偏重していたところがあったのではないかと思っているが、これからの高齢社会を考えたときには、ソフト事業・サービス事業をしっかり維持し、うまい節約の方法を考えていかなければならない。

勿論ただ切り詰めていくだけでは駄目で、収入を増やすことも必要。説明のパートでふるさと納税について触れたが、ふるさと納税に関しては特に頑張っていて、去年 3 億 4 千万円まで来た収入が今年はうまくいけば倍近くまでいけるのではないかと期待している。

企業誘致にしても、お金がうまく市に回るような企業誘致を進めるとか、民間の力を利用してお金をかけずにいろんなものを作っていくなどして、将来「小郡に住んでいて損したな」とは決して思われないよう、小郡の活性化を図っていきたい。食と農の複合施設についても、少しでも先に進めて皆さんに形をお示ししたいと思っている。積極的かつ総合的に様々なことに取り組んでいくので、今日いただいたご意見・ご心配はきちんと聞かせていただき、皆さんへの住民サービスのことも考えながら、この対策計画をしっかり実行していきたい。最終的には貯金通帳の残高が増えているぞ、というところまで持っていきたいと思っているので、どうぞよろしくお願いしたい。ご意見に感謝する。

発言者Ｇ：　こういう集まりに若い人がほとんど来られないのがとても残念。将来の小郡のことを考えたとき、ぜひ若い人が来るような集会のあり方を考えてほしい。年寄ばかり集まっても10年後は半分くらいいなくなっている。ぜひ30代40代の若い人の意見を聞く場を。

加地市長：　まったくごもっともな意見。ただこの立石校区でいうと、最近では三井高校の生徒さんが「災害時に非常食を準備していない家庭が多いのでは」という発案から地産の野菜である小松菜を使った非常食を考案するなど、若い人たちが地域の課題に目を向けて取り組むという動きが出てきている。取り組みの結果「自分たちにも地域の課題が解決できるんだ！」という手ごたえを感じてくれる若者も。この流れが大きくなっていくと、きっとこのような集まりの場にも出てきて「私が市長の代わりに頑張るぞ！」といってくれる人も現れるのではないかと期待している。皆さんにも若者たちの頑張りをぜひ見守ってもらい、地域に若者が活躍できる場を作っていただければ大変ありがたい。素晴らしいお尋ねだと思う。課題として持ち帰りたい。

秋永教育長：　立石校区の子どもたちは大変素直で素晴らしい子どもたち。地域の皆さんにも学校の内外でぜひ育成に関わっていただき、子どもたちが地域を誇りに思い、愛着を持ってくれるようご協力をいただければと思う。一緒に頑張っていきましょう。